『広島国際大学　総合教育センター紀要』投稿規定

（目的）

第１条

広島国際大学総合教育センターは、本学教職員の研究成果・教育成果および報告の発表を主たる目的として、紀要『広島国際大学　総合教育センター紀要』を発行する。

（発行者）

第２条

発行者は、広島国際大学総合教育センターとする。

（編集委員会）

第３条

総合教育センター内に編集委員会を置く。同委員会は、本規定に従い、編集発行に関する業務を行う。

（編集委員）

第４条

編集委員会は、総合教育センター長により委嘱された委員若干名で構成し、委員長は委員から選出する。その任期は1年とし、再任を妨げない。

（刊行頻度）

第５条

本誌は、原則として、年１回発行する。

（投稿資格者）

第６条

投稿資格者は次の者とする。

（１）本学所属教職員

（２）他大学研究者等との共著の場合、筆頭者は本学教員であること。

（３）本学大学院生との共著の場合は、指導教員の指導の下に院生が筆頭者となることができる。

（４）その他、編集委員会の認めた者（本学非常勤講師など）。

（著作の種類）

第７条

本誌に掲載する著作は、次の５種に分類する。

（１）論文

（２）研究ノート

（３）報告

（４）資料

（５）その他（編集委員会で認めたもの）

（執筆要項）
第８条
編集委員会は、紀要の体裁、提出方法、締め切りなどの執筆要項を別に定め、本学所属教員らに提示する。執筆者は、この執筆要項に従って、投稿原稿を作成する。ただし、特別なレイアウトなどを希望する場合は、事前に、編集委員会の了解を得ることを必要とする。
（原稿および制限枚数）
第９条
本誌に投稿する原稿は他に未発表のものに限る。原稿はＡ４・１ページ４０字×３０行で２０ページまでとする。ただし、上記の枚数を超える場合は、編集委員会の了解を得て投稿することができる。
（校正）
第１０条
校正は、原則として初稿までとし、投稿者の責任においてこれを行う。
（別刷）
第１１条
執筆者は、当該論文の別刷５０部の無償供与を受けることができる。
（原稿の受理および審査）
第１２条
原稿の受理日は原稿が編集委員会へ提出された日とする。投稿原稿の掲載可否および掲載順序は編集委員会において決定する。論文は２名以上の編集委員（必要に応じて編集委員会が必要と認めた者を含む）の査読をもとに採否を決定する。その結果、著者に修正・加筆を求めることがある。論文の内容により必要に応じて学部外の専門家に査読を依頼することがある。
（改訂）
第１３条
投稿規定、執筆要項ともに、本学所属教員の意見を踏まえ、編集委員会の議決、総合教育センター長の承認を経て改訂することができる。

付則
この規定は、２０１５年４月１日から施行する。

『広島国際大学　総合教育センター紀要』 執筆要領

・**用紙・文字数・行数**　A4 版　1 ページにつき 30 行× 40 文字

・**余白**　天地左右それぞれ 35 ㎜、30 ㎜、25 ㎜、25 ㎜。

・文章は**一段組もしくは二段組**で作成する。**横書き・縦書き**いずれも可。

・**行間**は固定値 18pt。**フォントサイズ**は特段の理由がない場合 10.5pt で統一。

・**図表**の掲載については、読みやすさに留意する。

・**図表**は執筆者が規定のレイアウトにあわせて組み込むこととする。カラー写真掲載経費、特殊紙使用経費等は原則として執筆者負担とする。

・**図や表の見出し**については、その統一性に配慮すること。

・**論文要旨**　執筆者名の後に一行あけて記載。英文要旨 250 語以内、和文要旨 400 字以内。（邦文の場合　要約：　欧文の場合 abstract:　改行せず　10pt）英文・邦文の順に記載。

・**題目（タイトル）**文字　MS ゴシック（欧文　原則 Century　分野において必要であれば他のフォントも可）16pt、太字、センタリング。（英訳（欧文の場合、日本語訳）題目は、裏表紙に記載。）副題のある場合は一行あけて（行のフォントサイズ 10.5pt）

・**副題**：同 16pt　一行あけて（行のフォントサイズ 10.5pt）

・**所属・著者名**　所属　一マス開け　著者名　文字 MS ゴシック　右寄せ（一マスあけ）

（欧文　原則 Century（分野において必要であれば他のフォントも可）12pt

例　広島国際大学総合教育センター　広国太郎

（欧文　左寄せ一マス開けで著者名、次の行に左寄せ一マス開けで所属）

著者が複数の場合、最初の行に主筆、次の行から任意の順番で同様に記載。

・**本文**　MS 明朝体　　欧文　Century（分野において必要であれば他のフォントも可）10.5pt

・**注**　原則として、本文の後にまとめて掲載、通し番号をふること。

MS 明朝体（欧文　原則 Century 分野において必要であれば他のフォントも可）9.5pt

・**引用文献**　論文の最後に一括して掲載する。

MS 明朝体（欧文　Century 分野において必要であれば他のフォントも可）10pt

・文献の記載様式は以下を基本とする。

文献は末尾に一括し、共著者 3 名以内（4 名以上は、英文は“et al”、和文は“他”とする）、表題、雑誌名、巻数（号）、初頁～終頁、発行年（西暦）の順に記載する。

提出　投稿論文の提出は電子的に行い、PDF 化したものを（保存用と執筆者の情報を空白にした審査用の２部を）E-mail に添付し編集委員会に送付すること。 E-mail の件名は「総合教育センター紀要第〇〇号投稿論文　（筆頭）執筆者」とする。また、原稿を紙媒体に印刷したもの（正、副の２部）も編集委員会に送付すること。

原稿には表紙を付け、表題・著者名・所属、Key Words(5 語以内）をいずれも英文および和文で記載し、連絡先（電話・ファックス・Ｅメールアドレスを含む）を明記する。

確認すべき事項については、編集委員会（s-kiyo@ic.hirokoku-u.ac.jp）に問い合わせてください。

2015.6.

編集後記

職務上の理由もあり、2019年6月21日に霞ヶ関の文部科学省にて開催された「医学・生命科学研究等に係る倫理指針及びカルタヘナ法に関する研究会」を傍聴した。遺伝子操作、万能細胞等についてはまったくの門外漢、ELSI（Ethical Legal Social Issues エルシー：研究にかかわる倫理的法的社会的諸課題、そうした諸課題を検討する諸活動）という言葉も初耳という体たらくで、場において展開された議論になかなかついていけなかったというのが正直なところである。とはいえ、「社会が利益を受けるイノベーションのためには、「科学的合理性」と「社会的受容」（倫理的妥当性）双方が重なる領域を広げることが必要。」（当日配布資料より。同資料は、文部科学省「ライフサイエンスの広場」にて参照可能。https://www.lifescience.mext.go.jp/files/pdf/n2190.pdf。）という開催趣旨を踏まえた報告は、専門分野にかかわる事柄について素人でも理解できるよう工夫されたものであり、触発されることもあった。人体のあらゆる細胞に分化し得るヒトES細胞（胚性幹細胞）、体細胞から作成されるiPS細胞、そのいずれからも理論的には生殖細胞を作成、受精することは可能（現在は倫理指針にて受精は禁止）といった、専門家にとっては常識であろう事柄も素人には驚く話で、倫理的、技術的課題をすっ飛ばして「クローン人間誕生？」などと空想（妄想？）したり、国内研究機関から海外の研究機関へのヒトES細胞分配に関する「計画から契約へ」と呼ぶべき指針改正の方向を知り、海外に流出した日本人のヒトES細胞の行く末をしっかり追跡できるのか、などと、いささかナショナリスティックな危惧を持ったり、また遺伝子操作の技術水準を鑑みて、例えばスポーツの分野でパフォーマンス向上のための遺伝子操作がなされたらどうなるのか、すでになされているのか（ちなみに現在、WADA（World Anti-Doping Agency 世界アンチ・ドーピング機構）の規定では、「遺伝子ドーピング」は禁止。）、といった関心が浮かぶなど、退屈を覚えない時間ではあった。一つ一つの生命の出発点である生殖、時間軸の中で生命と生命とをつなげる遺伝子、生命の根源に対する操作可能性が科学の名のもとに極限まで達している事実を突きつけられた時間でもあった。

関心は一転、9月29日NHKにて「AIでよみがえる　美空ひばり」が放送された。深層学習技術（ディープラーニング）を使った歌声合成技術によって、1989年に亡くなった昭和の国民的歌手、美空ひばりを再現するというプロジェクトに、音声のみならず、曲、歌詞、衣装、振り付け等、多彩な人々が取り組み、作詞家秋元康氏の新曲「あれから」をAI美空ひばりが一夜限りのコンサートで歌うまでを追跡した番組である。この試みを成功と言っていいのか、そもそもこうした試みは許されるのか、当初、CD化の企画はなかったとのことであるが11月27日にはネット配信、12月18日にはCD、カセットのリリースそして紅白「出場」と事態は進行、死者への冒とくではないかといった批判も起きるなど、人間存在、その表現にかかわるAIについてエルシーが問われている。にわかファンとしての感想は、いわば「待ってました。」というもの。番組を見て故・美空ひばりの新曲発表に感動、当初のリリー

スなしの方針を受け、「これは暗記しなきゃ」と録画を繰り返し鑑賞、折々に口ずさむなど視聴者の一人としてそれこそ番組を楽しんだが、改めて考えれば、「故・美空ひばりの新曲発表」という表現自体が死者による新曲発表という、本来不可能なことに対する科学の挑戦を意味している（そういえば「メディア」の本来的語義の一つに「霊媒」があった。最新科学が死者と生者をつなぐ「霊媒」の機能を追求しているということか。）。おそらくは本人のあずかり知らないところで、本人の了解を得ることなく、本人の表現ではないにもかかわらず、本人の表現と一般に受けとられかねないものが広く公開され、そうした表現が人々に感動をもたらす。そのことについて、さまざまな意見があろうし、そうした試みについて慎重な配慮が必要ということに異論はないであろう。

生殖細胞、遺伝子といった生命の根源に踏み込む操作可能性の追求、亡くなった表現者の表現の再現（というより創作）を目指した営み。関係者による人間の尊厳への配慮はそれなりに伝わるのだが、同時にこうした「素晴らしい」技術を思う存分に活用したい、やれるだけのことをやってみたいという熱気も伝わってくる。人間存在にはやみくもに知的衝動に駆られ、知の追求を自己目的化する習性がある。戦後日本を代表する文化人類学者、梅棹忠夫はそうした人間を「業としての科学」に取りつかれた存在であるとした。知りたい、試したいという「業」がもたらす科学技術の発達。梅棹は奔放な知的衝動が結果する人間の未来を「暗黒」ととらえていたようである（2011年6月5日NHK放送「暗黒のかなたの光明　文明学者　梅棹忠夫がみた未来」）。われわれはどこへ向かうのか。

「AI美空ひばり」のプロジェクトにおいて、作詞家秋元康氏は「人間とは何か」が問われているという。科学・技術の発達、その応用可能性をめぐって、人間の営みがどのように方向づけられるべきか。そうした問いに取り組むうえで「人間とは何か」という問いは避けられない主題であろう。

「人間とは何か」という古くて新しい主題を広くかつ深く考えてゆくこと、そうした当たり前の営み、問いが人間自身の知的活動の基本に置かれなければならない、そのことを改めて確認したい。また、この総合教育センター紀要がそうした主題を追求する場であり続けることを祈念する。

新学部発足を前にしたあわただしいなか、ご投稿いただいた先生方にはありがとうございました。また、査読いただいた先生方にも感謝申し上げます。査読者からの建設的な講評は、本紀要の一層の充実につながっていると確信しております。編集に携わり、記載の論考において「人間とは何か。」という主題が通底していると勝手に思い込んでおります。ありがとうございました。

例によって、編集委員長の公認されざる特権を行使した拙文を編集後記として掲載させていただきました。ご海容のほどを。

広島国際大学　総合教育センター紀要編集委員長　村上　智章

執筆者

鶴　田　一　郎	広島国際大学	心理科学部	臨床心理学科
上　月　具　挙	広島国際大学	保健医療学部	医療技術学科
小　林　　寛	広島国際大学	保健医療学部	医療技術学科
辻　本　洋　子	広島国際大学	医療栄養学部	医療栄養学科
小　山　達　也	青森県立保健大学	健康科学部	栄養学科
鹿　嶌　達　哉	広島国際大学	心理科学部	臨床心理学科
由　田　克　士	大阪市立大学大学院	生活科学研究科	

広島国際大学　総合教育センター紀要　第４号　　2020 年 1 月　印刷

2020 年 2 月　発行

編集・発行　広島国際大学　総合教育センター

〒 739-2695　広島県東広島市黒瀬学園台 555-36

電話　0823-70-4901

印　刷　所　三原プリント株式会社

（〒 723-0041　広島県三原市和田一丁目 5-13　電話 0848-64-1643）